# 小島信夫長篇集成④

月報① 二〇一五年八月　水声社

・『別れる理由』、私的な回想と感想　勝又浩
・小島信夫と徳田秋聲　大杉重男
・連載　小説『別れる理由』のために①　千石英世

## 『別れる理由』、私的な回想と感想

勝又浩

昭和五三、四年頃だったと思うが、当時「群像」の編集長だったH氏がある日、私の机に寄ってきて、ちょっと聞くが、小島さんの『別れる理由』をどう思う、という質問をされた。

そのとき私は「群像」新人賞（評論部門、審査員の一人が小島信夫氏だった）を貰ってまだ間もないころで、伊藤整・瀬沼茂樹の『日本文壇史』の新装版（全二四巻、後に文芸文庫にも入った）作製のためのアルバイト要員として不定期に講談社へ出勤していたのである。Hさんとはその数年前からの相識だったが、私は批評家になり始めて彼に原稿を見てもらうこともあったから、このときは私を試してみるという意味もあったのかもしれない。しかしそんな意中には思い及ばなかった私は実にのん気に、また単純に、面白いじゃないですか、毎月だいたいは読んでますよ、と答えたのだった。

むろんその答えに嘘はなくて、その頃の『別れる理由』は大庭みな子をはじめ、野間宏、柄谷行人、中上健次等々の面々が次々と実名で登場して、打打発止と交わされる会話が、生の本人を見ているよりも生き生きとして面白かったのである。いわば文壇ゴシップを聞くような楽しみもあったのだが、しかし、それだから面白いというのは実にノー天気な話で、全く批評家失格だったな、と後の祭りながら今にして思う。

こうして、私の答えがあんまり頼りなかったゆえだろうか、そのときのHさんとの会話はそれ以上発展しなかったような覚えである。しかし、こんなことがあって間

もなくだったが、「文學界」の「コントロールタワー」だったろうか、どこかの匿名時評で、『別れる理由』は日本中で三人の読者しかいない連載小説だとする揶揄的な記事が現れた。その三人とは、作者自身と担当編集者と校閲者だというのだ。後に通読したとき、これに類したことは既に作品のなかで言われていることを知ったが、匿名氏がそれをもじったのか、それとも作者が文壇の噂話を取り込んだのだろうか。

先にあげた『日本文壇史』は連載が一七年に及んで記録破りだったが、伊藤整の小遣い稼ぎ仕事だと皮肉られていた。『別れる理由』もこのころ連載一〇年を超えていたから、『日本文壇史』に継ぐだらだら仕事だと見られていたわけだ。

こんな陰口のあることを知って、私はあのときHさんは「群像」編集長として悩んでいたのだろうと、遅ればせながら推察した。そして、もしかすると、私のノー天気な答え、面白いじゃないですかが、案外連載打ち切りの先延ばしに少しは役だったのかもしれないと想像もしたのだった。やはり相当極楽とんぼだと言われそうだが、しかし、この頃から『別れる理由』があちこちで話題に上ることが多くなったのも事実なのだ。

私はむろん、毎月きちんと読んでいたわけではないが、それは雑誌の連載もの一般について言えることだろう。そうしたなかでは例外的に、『別れる理由』だけはよく覗いていたのだ。そして今月の締め切りが迫って、原稿を取りに来た編集長の石段を上がってくる靴音が聞こえてきたとか、小説の主人公前田永造が突然作者に電話をかけてきて、先月号に載った『別れる理由』についてあれこれ言い出す、かと思えば、それを書いた前回の評判がよかったと、翌月には早速作品に書かれる、というような破格ぶりがどこまで行くのかと、その度に楽しんだのである。一流の書き手というものは死ぬまで冒険、新しいものに挑戦してやまないが、小島信夫も確実にそういう作家の一人だった。

*

小島信夫論というトータルな形の仕事はしていないが、私は『アメリカン・スクール』や『抱擁家族』については数え切れないほど書いてきた。占領、家族、宗教、文化、ジェンダー等々、戦後の時代や文学のことを考えてこちらの文脈が変わると、それに応じて作品も違う面を見せてくれるから、その度に新しい発見もあって論が尽きないのである。最近では、『暮坂』『うるわしき日々』から『各務原・名古屋・国立』、そして『残光』に至るまでの一連の作品についても同様のことが言える。小説の内容、話としては極めて個人的なことなのだが、その意識の先端は確実に時代の深層に届いているからだ。なかでも晩年の「同時進行形」小説、生きることと書くこ

ととが重なった超前衛小説については、私は機会あるごとにまだまだ何度でも言うことになるだろうなと思っている。

しかし、こう考えてくると、同じように重要な、前衛的な問題作であるはずの『別れる理由』については、ほとんど何も言ってなかったなと、改めて思う。いや、打ち明けて言えば、『別れる理由』が単行本になった当時、ある学生グループに頼まれて話したことがあった。何を言ったのか具体的なことは一切忘れているが、ただこの、モンスターのような怪奇な小説の、その要の問題については何も言えなかったこと、ついに土俵には上れなかったことだけは、苦い思いとともに明確に覚えている。以来、私は『別れる理由』については蓋をしたままで来たらしい。これはアメリカ文学について知らなければ確かなことは言えないなと、そのとき思ったのである。しかしむろん、そんなはずはないだろう。日本の文学しか知らない者の読み方があってもよいはずで、私の次の課題は『別れる理由』であるかもしれない。

小説というものは本当のことが言いたくてウソをも辞さない書きものだが、私小説も、真実の私を言いたい思いが極まって、小説を書いている自分自身をも小説に書いてしまう、そういうところまで突き進んだジャンルである。いま思うに、この『別れる理由』も、そうした精神の運動そのものを書こうとした、小島信夫の最初の試みだったのではないだろうか。

もともとは短篇連作の『町』として始まった連載小説が、その何回目かの一篇がどんどん増殖して長くなり、ついに全体を蔽ってしまったような小説だった。それは、別の言い方をすれば、現実を振り返り、なぞり、あるいは再現表現する過程で働く意識想像妄想が、そのリアリティーが逆に現実や作者自身を浸蝕してゆくことであるし、生を浸蝕してくるその妄想を追うことは、反面では小説自体を毀(こわ)してしまうことにもなる。先に「モンスターのような怪奇な小説」だと言ったが、モンスターなのは小説より以前に、人間の意識そのものなのだ。『別れる理由』は、あえて強調してみれば、小説を書く生の原理＝モチーフが自己増殖してとうとう小説自体を破壊してしまう、その過程をこそ、ぎりぎりのところで小説にしているのだ。

そんな仕事に、ではどんな意味があるのか、いずれゆっくり考えたいが、今はもう一つ挑発的に――政治的社会的な革命ではなく、人間の存在自体の革命に挑戦した埴谷雄高『死霊』と、小説破壊にまで突き進んだ小説意識を小説にした『別れる理由』と、二つはまことに対極的ながら、ともに戦後文学のなかの巨大な収穫ではないか――いま私はそんなふうに考えている。

（かつまたひろし、文芸評論家）